

ロシア語における *dativus ethicus* とその周辺

栗原成郎

1 序

一般に、与格には感性的な働きが強い。W. ハーフェルスは『説明的統辞論提要』において「個々の格形態のうち、与格ほど、感情の担い手の役割を引き受けるに相応しい格は他にない」⁽¹⁾と述べ、ドイツ語における所有の与格と所有の属格の交替に、まず、考察の目を向けている。与格表現 *Den Eltern starb ihr einziges Kind* (その両親は独りっ子に死なれた) には、共存の属格表現 *Das einzige Kind der Eltern starb* (両親の独りっ子が死んだ) に見られない、深い感慨がこめられており、後者は前者に比して現われることが少ない。また、近代ドイツ語の方言のなかには、古い所有の属格が《*meinem Vater sein Haus*》式の与格表現によって殆んど完全に放逐されているものもあるが、この言語形式が存在を確保するに至った原因は、まさにこの与格を本来的に特徴づけているところの熱情 (*Gefühlswärme*) である、とハーフェルスは説明する。Du bist *mir* ein netter Kerl (お前さんはほんとうにいい奴だよ) における与格の如き、民衆語で愛好されている、さまざまな意味のニュアンスを持つ *dativus ethicus* (心情の与格) は、感情表出の与格の純粋なものとされる。この与格は、ドイツ語の場合、時に応じて、随意に用いられるにすぎないが、言語のなかには、例えばバスク語のように、動詞にとって不可欠な、規則的に現われる補語となっているものもある、と言う。更に、ハーフェルスは、*dativus ethicus* と密接な関係にあるものとして再帰的表現 (例、古英語 *he gewat him* 「彼は行った」) に注目し、この問題に関する詳細な比較研究が望ましいことを指摘している。

スラヴ語における *dativus ethicus* の問題を個別的に (とくに、ハーフェルスにおけるような目的論的言語研究の立場から) 論考した、詳細な研究は未だ見られないが、その用法については、既に早く、ミクローシチ⁽²⁾ およびヴォンドラーク⁽³⁾ に基礎的な記述がある。古教会スラヴ語の与格については、比較的新しく、プラーヴディン、⁽⁴⁾ ムラゼック⁽⁵⁾ の研究があり、*dativus ethicus* の問

題にも触れている。古ロシア語の *dativus ethicus* については、ブスラーエフ、⁽⁶⁾ ロームチェフ、⁽⁷⁾ スプリンチャーク、⁽⁸⁾ 最近では、アカデミア版『東スラヴ語歴史・比較統辞論』⁽⁹⁾ などに、それぞれ、短い言及がある。現代ロシア語にこの与格の用法を認める立場をとっているのはシャーフマトフ⁽¹⁰⁾ である。

しかしながら、以上の諸研究において、スラヴ語の〈*dativus ethicus*〉の用語（定義）と用法分類には明確な統一性が見られず、殊に、ロシア語に関しては、シャーフマトフのようにこの言語に *dativus ethicus* を認める場合にも、その用法の継承の仕方——消失にせよ、発達にせよ——の独自性についての認識に不十分の感を免れ得ない。

- (1) W. Havers. Handbuch der erklärenden Syntax. Heidelberg, 1931, S. 36.
- (2) F. Miklosich. Vergleichende Grammatik der slavischen Sprachen. IV. Band. Syntax. Heidelberg, 1926, S. 601-604.
- (3) W. Vondrák. Vergleichende slavische Grammatik. II. Band. Formenlehre und Syntax. Göttingen, 1908, S. 363-364.
- (4) А. Б. Правдин. Дательный приглагольный в старославянском и древнерусском языках. 《Уч. зап. Ин-та славяноведения АН СССР》, т. X, 1956, стр. 3-115.
- (5) Р. Мразек. Дательный падеж в старославянском языке.—В сб. 《Исследования по синтаксису старославянского языка》. Прага, 1963, стр. 225-261.
- (6) Ф. И. Буслаев. Историческая грамматика русского языка. М., 1959, стр. 394.
- (7) Т. П. Ломтев. Очерки по историческому синтаксису русского языка. 1956, стр. 254-255.
- (8) Я. А. Спринчак. Очерк русского исторического синтаксиса. (Простое предложение). Киев, 1960, стр. 139.
- (9) Сравнительно-исторический синтаксис восточнославянских языков. Члены предложения. АН СССР. Под ред. В. И. Борковского. М., 1968, стр. 195-197. (《Дательный падеж》の執筆担当者は Р. Б. Кершиене).
- (10) А. А. Шахматов. Синтаксис русского языка. Л., 1941, стр. 339.

2 *dativus ethicus* の文法的特性

シャーフマトフは、行為や作用を受ける人の利害・関心を表わす与格〈*дательный заинтересованного лица*〉の用例を集めて、これを一括して〈*dativus ethicus*〉と呼んでいるが、その内容は、むしろ、〈*dativus commodi, incommodi*〉（利害の与格）と呼ばれているものに近く、集められた用例のう

ち、伝統的な用語法における〈dativus ethicus〉(シャーフマトフ自身はこの用語に何の定義も与えていない)の名に値するものは殆んどない、と言ってよい。彼の挙げている与格の例は、人称代名詞 тебе, вам, мне, ему と名詞 моему сынку, дурным людям で、再帰代名詞 себе の例はない。

そこで、スラヴ語の文法において伝統的に〈dativus ethicus〉と呼ばれているものが何であるかを再検討し、そのロシア語における用法を考察する必要があると感じられる。

まず統辞論的に見て、dativus ethicus ないし dativus commodi は、動詞に支配される斜格補語としての与格(例、помогать отцу, верить себе)と違って、動詞との結び付きが緩い、いわゆる〈Loserer Dativ〉(свободный дательный)である。例えば、古ロシア語の Что ми шумить, что ми звенить далече рано предъ зорями? (Слово о полку Игореве) (Что мне шумит, что мне звенит далече рано перед зорями? Л. Тимофеев 現代語訳)において、人称代名詞与格 ми は動詞との結合に緊密性・必然性を持たない。『イーゴリ軍譚』のある注解者は、この与格の用語において人称代名詞の意味は磨滅して、助詞(определятельная частица)の意味になっている、と言う。⁽¹⁾これは通称「アカデミア文法」の説明に近い。アカデミア文法に従うと、Поговори ты мне; Сидит себе и улыбается のようなタイプの文において、мне, себе は動詞との語結合を形成しない、なぜなら、それらは客語的關係の表現に役立たないからであり、代名詞 мне はこの場合 частица の機能を果し、一方 себе はこのような用法においては述語を構成する частица である。⁽²⁾このような себе の用法は古い dativus ethicus の流れを引くもので、口語において頻繁に用いられる。例、[Я] до варенья очень охотница, —говорила Липа. Сяду себе в уголочке и все чай пью с вареньем. Чехов. В овраге。(「あたしはジャムに目がないのよ」とリーパが言った。「ひとりで部屋の隅っこに坐っちゃあ、のべつジャム入りのお茶を飲むの」)。4巻本および17巻本のアカデミア露語辞典もこのような себе を〈частица〉として見出し語に挙げている。統辞論的処理の必要から、品詞的に曖昧な、形態論の一種の屑籠ともいふべき〈частица〉に余りにも多くのものを投げ入れることは好ましくないが、人称代名詞および再帰代名詞の与格のこの統語的特殊性については、多くの人々が注目している。

この〈dativus ethicus〉について、カールスキイは「それは動詞を殆んど説明せず、動詞に依存することが殆んどない」⁽³⁾と言い、プラーヴディンは「こ

の与格は支配する動詞と殆んど結びついておらず, управление (支配) と примыкание (附加) との間の境界にある」⁽⁴⁾ と述べ, シャーフマトフは「言わば挿入語のようなもの」⁽⁵⁾ と見做している。ペシュコーフスキイは, 母親が子供に言う場合の言い付け《Чтоб ты мне не смела высовываться из двери, пока я не приду!》(私が帰ってくるまでドアの外へ出るんじゃないよ); 《Чтоб ты мне вела себя прилично!》(お利口にしているんですよ) を例に挙げて, 与格 мне は弱被支配成分 (слабо-управляемые члены) で, 動詞 смела, вела に依存せず, 語群全体に係る, と考えている。⁽⁶⁾

以上を総合すると, このような与格は, 文構成の要素として不可欠のものではなく, 陳述に感情的要素を加え, 文体に生氣をもたらすための虚辞と見ることができよう。

- (1) В. И. Стеллецкий. Слово о полку Игореве. М., 1965, стр. 148.
- (2) Грамматика русского языка. т. II, ч. I. АН СССР. М., 1960, стр. 130.
- (3) Е. Ф. Карский. Белорусы. Язык белорусского народа. вып. 2-3. М., 1956, стр. 412.
- (4) А. Б. Правдин. Указ. соч. стр. 102.
- (5) А. А. Шахматов. Указ. соч. стр. 339.
- (6) А. М. Пешковский. Русский синтаксис в научном освещении. 3-е изд. М., 1928, стр. 333.

3 dativus ethicus の意味

dativus commodi, incommodi (利害の与格), dativus ethicus (心情の与格), dativus possessivus (所有の与格), dativus sympatheticus (交感の与格) は互いに意味が類似し, 用法に区別がつかないことが多い。ミクローシチ, ヴォンドラーク, ブルークマンなどの古典的な比較文法は, dativus commodi に基づくもので, 人称代名詞の第1人称と第2人称の与格 (とくに enclitica の ми, ти) の用法のみを dativus ethicus と呼ぶ。ミクローシチによると, dativus ethicus は「満すべき要求を持っている人, 事柄に対して喜びや不満を持っている人, その人の見解に事柄が適合しているところの人を指す」。⁽¹⁾ カールスキイによれば, dativus ethicus は「その人にとって要求や希望の成就が重要であるところの人, あるいはある一定の状態に関心を持つ人を表わす」。⁽²⁾

古ロシア語, 古教会スラヴ語における dativus ethicus の用例は余り多くない。ムラゼックは, 古教会スラヴ語におけるこの与格の用法がごく少数例しか見当たらないことを報告している。⁽³⁾ その代表例は съмотрите ми зьлодѣство

ихъ (Супр.) (彼らの悪しき行ないを視よ) の如く、動詞〈見る〉と共に用いられた命令や疑問の表現である。dativus ethicus とは、主として、話者の報知対象に対する情緒的態度、または話者が対話者に対して同一の関心を持つように要求する気持ちの非分析的な表現であり、そのために陳述に誠意や親密さなどの感情のニュアンスが付与される。従って、そこに現われるのは1人称および2人称の代名詞であり、第3人称の代名詞(ないし第三者を示す名詞)が現われることはない、と言ってよい。第3人称をとる場合は、dativus ethicus がより明確に、分析的になった表現で、dativus commodi と見做すのが普通である。

古ロシア語の与格表現 отъць ми оумьрль (Лавр. лет.) (汝の父は逝去した) には、日本語の「汝は父に死なれた」に近い、話者の感慨があると同時に、先にハーフェルスを引いて述べたように、この心情の与格には所有・所属(принадлежность)のニュアンスもある。dativus ethicus はとくに南スラヴ語において強く生きているが、ロシア語においては、人称代名詞1・2人称与格の enclitic 形 ми, ти が17世紀中葉までに姿を消している⁽⁴⁾のと並行して、その本来的な、自由な用法は失われている、と考えるべき。しかしながら、dativus ethicus が、Он идет себе и в ус не дуёт (彼は知らん顔してさっさと歩いていく) のような表現における себе にその痕跡を留めるのみで、「現代ロシア語からまったく消失した」⁽⁵⁾と言うのは正しくない。現代ロシア語においても、「話者がある何かに関して自分の利害関係を持つ時の危惧の念・苛立たしさ・忌々しさを表わすために用いられる」⁽⁶⁾ мне や、「威嚇・忌々しさ・幻滅を表わすために用いられる」⁽⁷⁾ тебе (俗語形 те) の用法に dativus ethicus の意味は保たれている。例：Не разбейте вы мне стекло! (ガラスを破っちゃ困るよ); Врагов имеет в мире всяк, Но от друзей спаси нас, боже! Уж эти мне друзья, друзья! Пушкин. Евгений Онегин. (この世では誰でも敵を持っているが、ああ、なんとかご勘弁ねがいたいのはむしろ親友のほうだ。ほんとうに、あの親友と称する連中は!); [Сальери:] Мне не смешно, когда маляр негодный мне пачкает Мадонну Рафаэля. Пушкин. Моцарт и Сальери. (僕は役立たずのへぼ画家がラファエルのマドンナを塗りたくっても、おかしいとは思わない); [Боярыня] Что те приключилось, Сударыня? Не видишь, что ль, меня? А. К. Толстой. Посадник. (どうしたの。私がわからないの。); — Вот тебе и воздушная тревога, — сказал Витя. К. Федин. Брат и сестра. (「そら空襲警報だ」とヴィーチャ

が言った)。

dativus ethicus は述べる事柄に関する話者の利害・関心に発する感情の非分析的な表現, およびその対話者(あるいは第三者)への転移であり, 感情的・心情的であるが故に, 感嘆文・命令文・疑問文において現われることが多い。

- (1) F. Miklosich. op. cit., S. 601.
- (2) E. Ф. Карский. Указ. соч. стр. 412.
- (3) P. Мразек. Указ. соч. стр. 241-242.
- (4) П. Я. Черных. Историческая грамматика русского языка. 3-е изд. М., 1962, стр. 219.
- (5) Сравнительно-исторический синтаксис восточнославянских языков. Члены предложения. М., 1968, стр. 196.
- (6) Толковый словарь русского языка. т. IV. Под ред. Д. Н. Ушакова. М., 1940, стр. 1449.
- (7) Словарь русского языка. т. IV. АН СССР. М., 1961, стр. 592.

4 自動詞+себе の語法

dativus ethicus の名残りが, 現代ロシア語においては, Она себе молчит (彼女はただ黙っている) タイプの文における再帰代名詞与格 себе に特徴的に見られることは, 多くの人が指摘している。この себе はアクセントがなく, 口語において, 動詞ないし代名詞と共に用いられ, 「動作が自由に, 勝手に, 自分の気がすむように行なわれることを強調する」。⁽¹⁾ この与格は有利の与格 (*dativus commodi*) に源を発し, 「自分の利益・満足のために」→「他人に構わず」→「勝手に・気儘に」のように意味が狭められ, 動詞と共に副詞的に用いられる, と考えることができる。

ミクローシチはこの再帰代名詞与格について次のように考察している。「与格 *sebê, si* は, 主語が行為を自分自身のために行なうこと, 状況が主語にのみ適合することを示す。この語結合において, *dativus ethicus* に関連する本来的な意味は, しかし, 大抵, きわめて弱まっている。この *sebê, si* と共に現われる動詞は, *sitzen (= сидеть), liegen (= лежать), stehen (= стоять), gehen (= идти, ходить); denken (= думать), trauern (= горевать, тосковать); leben (= жить), sein (= быть)*」。⁽²⁾

ロシア語において себе と共に用いられる動詞は, ミクローシチが示しているごとく, 語彙的にある程度の限界がある。それらの動詞は斜格補語を伴わな

い自動詞で、しかもある程度時間的持続を伴うものが多い。例：Он лежит себе там, и ничего не говорит (彼はそこに横になったまま、何も言わない); Онегин спит себе глубоко. Пушкин. Евгений Онегин. (オネーギンは深々と眠りをむさぼっていた); Наш народ не знает ни одного своего поэта; он поет себе доселе „Не белы-то снежки”, не подозревая даже того, что поет стихи, а не прозу……Белинский. Сочинения А. Пушкина. (わが国民は自分たちの詩人を知らない。国民は今日まで „Не белы-то снежки” を歌い続けてきた、それが韻文であって散文でないことすら疑わずに……)。「自由に・気儘に・勝手に」の意味は次のような場合によく表わされている：Плавунчик ходит себе по избе, нас ни чуточки не боится. В. Бианки. Плавунчик. (ひれあししぎは小屋の中を思いのままに歩きまわって、ちっともわれわれを怖れない); Ступай себе в синее море, Гуляй там себе на просторе. Пушкин. Сказка о рыбаке и рыбке. (青い海へ帰って行って、広々とした水の中で遊ぶがいい); — Разве преподавателям гимназии и женщинам прилично ездить на велосипеде? — Что же тут неприличного? — сказал я. — И пусть катаются себе на здоровье. Чехов. Человек в футляре. (「中学校の教師ともあろうものが、おまけに婦人までが自転車に乗っていいものでしょうか」。「何が悪いというのです」と僕は言った。「健康のために乗せておけばいいじゃないか」);……говори себе, что хочешь и сколько хочешь, мне все равно, и так и так чай пить. А. Твардовский. Печники. (何とでも、好きなだけ言え、おれにはどうでもいいことで、おれはただこうしてお茶を飲んでいるだけのことよ)。

慣用句 знай себе (知らん顔で、平気で); живет ничего себе (かなりいい暮らしをしている); так себе (まあまあだ) における себе も *dativus ethicus* が起源である。

これらの自動詞と共に用いられる再帰代名詞の与格はロシア語、ポーランド語、ブルガリア語において頻繁に用いられると言われるが、⁽¹⁾ 古教会スラヴ語、および古ロシア語の最古期の文献には再帰代名詞の *dativus ethicus* の明確な用例はなく、現代ロシア語の用法と同様な用例が見られるのは16～17世紀の文献においてである。⁽²⁾ 従って、この用法は比較的新しい発達と考えられる。

(1) Словарь русского языка. т. IV. АН СССР. М., 1961, стр. 92.

(2) F. Miklosich. op. cit., S. 602.

(3) W. Vondrák. op. cit., S. 363.

- (4) В. И. Борковский, П. С. Кузнецов. Историческая грамматика русского языка. 2-е изд. М., 1965, стр. 470.

5 себеを伴う再帰構文

ロシア語には、Я купил *себе* новую шубу (私は新しい毛皮外套を買った); Медведь устраивает *себе* берлогу (熊は自分の穴をつくる); Он вчера сломал *себе* руку (彼はきのう腕を骨折した); Пионеры поставили котелок на огонь, чтобы сварить *себе* обед (ピオネールの少年たちは食事を作るために鍋を火にかけた); Стихи Маяковского завоевали *себе* всемирную славу (マヤコーフスキイの詩は全世界的な名声を得た) などの構文におけるような、文の主語(人を示す場合が多い)の側からみた行為における利害関係を表現する、一見虚辭的な再帰代名詞与格の用法がかなり頻繁に見られる。

ロームチェフはこの利害の与格の用法が現代ロシア語において保持されていることを認めるが、動詞の表わす行為の目的の表現(dativus finalis)としては、用法がきわめて限られていて、сделал что-либо《себе》のタイプの構文において《для себя》の意味として(例: приготовил что-либо《себе》)現われることを示している。⁽¹⁾

しかしながら、われわれは、ここで、外見上同一の《他動詞+себе+直接補語(対格)》の構文でありながら、その内部構造を異にするものの存在に注意しなければならない。例えば、а) Я купил *себе* книгу; Она варит *себе* кашу と б) Он почесал *себе* спину правой рукой とは同一構造ではない。а)の動詞は купить книгу брату, варить кашу ребенку のように二重格支配の可能な強支配動詞であり、与格 себе は間接目的語の брату, ребенку の位置に代入的に立ち得る。この場合の себе は、従って、動詞に支配される間接補語であるのか、それとも「自由な与格」である dativus commodi であるのか、曖昧である。二重格支配を予想し得る動詞のうち、あるものには、その語彙的性質によって、間接補語の与格が для + 生格の意味に近いものがある。⁽²⁾ купить книгу брату: купить книгу для брата = купить книгу себе: купить книгу для себя; варить кашу ребенку: варить кашу для ребенка = варить кашу себе: варить кашу для себя。б)の語群 почесал *себе* спину においては、与格 себе は動詞と語結合を成さず、語結合 почесал спину に関連する。この語法はシャーフマトフが dativus ethicus の用例とし

て挙げた Она подошла ко мне и поцеловала мне руку と同類で, *dativus sympatheticus* (交感の与格)⁽³⁾ と呼ばれるのが普通である。

a) 利害の与格 (*dativus commodi et incommodi*) としての себе。

この себе は「獲得」の意味を持つ他動詞と共に現われることが多い。「獲得=自分のものにする」の意味は利害関係を表わす与格と最も密接に関連する。「損失」の場合も、「自分にとってマイナスのものを得る」と見なす。

◇присвоить/присваивать себе что-л.

Это его оскорбило, и, заметив добрую лошадь, принадлежавшую старшине, он из мести решил присвоить ее себе. Пушкин. Джон Теннер. (……その馬を自分の物にしてやろうと決心した)。

◇усвоить/усваивать себе что-л.

Живя между чеченцами, казаки переродились с ними и усвоили себе обычаи, образ жизни и нравы горцев. Л. Толстой. Казаки. (……コザックたちは山岳人たちの習慣, 生活様式, 習俗を身につけた)。

◇завоевать/завоевывать себе что-л.

Мы молоды, не уроды, не глупы; завоюем себе счастье! Тургенев. Накануне. (……幸福を手にしてみせる)。

◇приобрести/приобретать себе что-л.

Книги эти я приобрел себе. Достоевский. Униж. и оскорбл. (これらの本が手に入った)。

◇снискать/снискивать себе что-л.

Единственное занятие, которым он мог бы снискать себе жизненные средства, было нищенство. Ильф и Петров. 12 стульев. (彼が生活の資を得ることができる唯一の仕事は乞食稼業だった)。

◇нажить/наживать себе что-л.

Нажил я себе и дом, и деньги. Пушкин. Сц. из рыцарск. времен. (家も出来れば, 金も溜まった)。

◇выпросить/выпрашивать себе что-л.

Выпросил себе отпуск вне очереди. Ушаков. (順番外に休暇をもらうことができた); Концессию на железную дорогу получить, банк завести, льготу какую себе выпросить——или там что-нибудь в таком роде——никто на это как дворяне! Тургенев. Новь. (……何らかの特典をもらうこと……)。

◇выплакать/выплакивать себе что-л.

Когда ей не дали автомат, она заревела и выплакала-таки себе оружие. Вершигора. Люди с чистой совестью. (彼女は泣きわめいて、とうとう武器を手に入れた)。

◇спросить/спрашивать себе что-л.

В трактире знали Герасима и понимали его знаки. Он спросил себе щей с мясом и сел, опершись руками на стол. Тургенев. Муму. (……彼は肉入りのシチーを注文した……)。

◇заказать/заказывать себе что-л.

Он поправлял черный галстук бантиком, садился за столик и заказал себе пиво и воблу. Паустовский. Шиповник. (……ビールと干物の魚を注文した)。

◇уяснить/уяснять себе что-л.

В душе его вдруг поднялась такая неожиданная путаница молодых мыслей и надежд, противоречащих всей его жизни, что он, чувствуя себя не в силах уяснить себе свое состояние, тотчас же заснул. Л. Толстой. Война и мир. (……自分の置かれている状況を理解する……)。

以下、実際の用例は省略するが、利害のニュアンスを持つ себеは、次のような動詞（およびそれらの類語）と共に用いられることが多い。строить, готовить, купить, брать, шить, варить, искать, найти, мыслить, рисовать など。

しかし、利害の与格 себеには、『‘Я приехал’——повелительно требует себе дополнения』（Л. В. Щерба）（‘Я приехал’は絶対的に補語を要求する）のとき、個人的、修辭的な用法もあり、その使用範囲を明確にすることは困難である。

また、この себеにはイディオム化したものがある。оставить себе лазейку（逃げ道を残しておく）； проложить себе дорогу（自分の進路を開拓する）； рыть себе яму（自ら墓穴を掘る）； нагреть себе плечи（働き疲れる）； портить себе кровь（腹が立つ）； делать себе завивку（パーマメントをかける）； заметьте себе номер дома（番地を覚えておいて下さい）； строить себе иллюзии（妄想をいただく）など。

б) 物主の与格 (dativus possessivus) ないし交感の与格 (dativus sympatheticus) としての себе。

Наполненный ягдташ немилосердно резал *мне* плечо. Тургенев. Бежин луг. (いっばいに詰まった獲物袋が無情にも肩にきりきりとくいこんで痛い) において人称代名詞与格 *мне* は物主的に *плечо* に関係しながら, 物主代名詞 *мое* に置き換え得ない, 感性的な意味のニュアンスを持つ。この与格は人間の身体が動詞の表わす作用を受ける時に用いられ, 動詞の主語が自分の身体にある作用・動作を及ぼす時には *себе* が用いられる。

Старик поднялся, сел на кресло и, взявшись за подбородок, стал кусать *себе* пальцы…… Тургенев. Отцы и дети. (……自分の指を噛みはじめた); — Это точно, что тени нету, — отвечал Николай Петрович и потирал *себе* брови. Там же. (……眉をこすった); Павел Петрович помочил *себе* лоб одеколоном и закрыл глаза. Там же. (パーヴェルは額にオーデコロンをつけ, 目を閉じた)。

この *себе* は「負傷・けが」の意味のニュアンスを持つ動詞と共に用いられる時は, 不利・被害の与格 (*dativus incommodi*) に近い。

Когда был я мальчишкой лет десяти, то захотелось *мне* поймать солнце стаканом. Вот взял я стакан, подкрался и — хлоп по стене! Руку разрезал *себе*. Горький. Мать. (……手をけがした); Поди прочь, безумный мальчишка! Где тебе ездить на моем коне? На первых трех шагах он тебя сбросит, и ты разобьешь *себе* затылок об камни. Лермонтов. Бэла. (……お前は岩にぶつかって, 首をへし折るぞ); Я сегодня обожгла *себе* утюгом левую руку…… Работать никак нельзя. Достоевский. Бедные люди. (私はきょうアイロンで左手を火傷した); Он оттоптал *себе* ноги на прогулке. Ушаков. (散歩のとき足を痛めた); Зимой…… Они отмораживают *себе* руки и ноги и часто даже замерзают. Чехов. Остров Сахалин. (彼らは手足に凍傷を負い, 凍死することさえしばしばある); Со всего размаху ударил он кулаком по кухонной печке, повредил *себе* руку. Достоевский. Преступл. и наказ. (……手を痛めた); Сергей очень устал и натер *себе* ноги. Как-то дойдет сюда? Тург. Арх. бр. (足にすり傷をこしらえた)。

なお, この交感の与格は, 自動詞と共に用いられる時は, 《動詞+与格+前置詞句》の構文をとり (例: Она посмотрела *мне* в глаза; Пуля попала *ему* в грудь), その再帰的用法も可能である (例: Он посмотрел *себе* под ноги)。

主語の利害を、多かれ少かれ、表わす与格 себе を伴う再帰的表現において、動詞と себе との結びつきの度合は一樣ではない。a) のグループにおいては、1) *позволить кому что* のような二重格支配動詞の間接補語として、себе が統辞的必然として現われる場合（例：*позволить себе вольности* ‘遠慮なくふるまう’）；2) *представить себе что* のように себе が語彙的に必要な慣用句的表現；3) *завоевать (себе) доверие*（信用を得る）のように、себе の使用が、必須ではないが、具体的な文の中で、主語の利害・主語への帰属を強調するために、文体的に好まれる場合が区別される。b) のグループにおける себе は a) のそれに較べ、感覚的な意味のニュアンスが強い。

(1) Т. П. Ломтев. Указ. соч. стр. 254.

(2) Грамматика русского языка. т. II, ч. I. стр. 128.

(3) この用語はドイツ語の文法において普通に用いられるが、P. Mrazek は W. Havers が *Untersuchungen zur Kasusyntax der indogermanischen Sprachen*, 1911 において用いた適切なる用語として、自己の研究において借用している（前掲書, 240 頁）。